古代史散策

No. １１１

淡路島歴史散策

バスツアー

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

平成18年10月作成
平成29年 9月復刻

《 コ ー ス 》

守口―明石海峡大橋―淡路 SA―伊弉諾(いざなぎ)神宮―サンライズ淡路（昼食）―自凝島(おのころしま)神社―淡路国分寺―淳仁天皇陵―絵島・岩樟(いわくす)神社―淡路ハイウエイオアシス―守口

（ 総　　説 ）

〈 淡路島の古代 〉

瀬戸内海の東部に横たわる淡路島は、周囲 203ｋｍ　面積 596 ㎢，現在の人口 14 万人の小さな島であるが、古来数々の歴史とドラマが展開されてきた。

漁労や製塩，海運などに従事した淡路の海人たちが育んできた、伊弉諾(いざなぎ)・伊弉冉(いざなみ)二神にまつわる壮大な国生み伝説があり、難波や河内朝廷の頃、太陽が沈み，聖水が湧く聖地とされた淡路島は、それ以後も海・山の幸を朝廷に貢納する御食(みけ)の国であった。銅鐸や銅剣の出土も多く、淡路島の古代は、まさに歴史とロマンに満ちている考古学上からも注目される島であった。

近年「淡路縦貫道」などの大規模開発で多量の遺跡が出たが、多くが「記録保存」と云う形で破壊された。

畿内に近い淡路は中央の影響が大きく、この島を通って都と四国を結ぶ南海道は、小規模であったが荘厳華麗な淡路国分寺など、華やかで高度な文化を島へもたらした。その一方、[47]淳仁天皇や早良(さがら)親王の配流は、島民を驚かせる大事件であったに違いない。

＜淡路島が日本遺産に＞

洲本市・南あわじ市・淡路市が申請したストーリー「『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～」は平成 28 年（2016 年 4 月）、日本遺産に認定されました。

現存する日本最古の歴史書『古事記』の始まりには、壮大な天地創造の神話のなかで最初に誕生した“特別な島”が淡路島であると記されています。その背景には、新たな時代の幕開けを告げる金属器文化をもたらし、後に塩づくりや巧みな航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた“海人（あま）”と呼ばれる海の民の存在がありました。

国生み神話に思いをはせ、古代国家形成を支えた海人の足跡をたどる。淡路島には今も、点在する数々の文化財とともに、悠久の歴史が紡ぎ出したドラマチックなストーリーが色濃く残されています。

ストーリー構成

1．古事記に描かれた天地創造の物語「国生み神話」
2．金属時代の幕開けをもたらした「海の民」
3．塩づくりと航海術で王権を支えた「海人（あま）」
4．食で都の暮らしを彩った「御食国（みけつ）」

注）この項、淡路島日本遺産 HP より抜粋

〈　各　説　〉

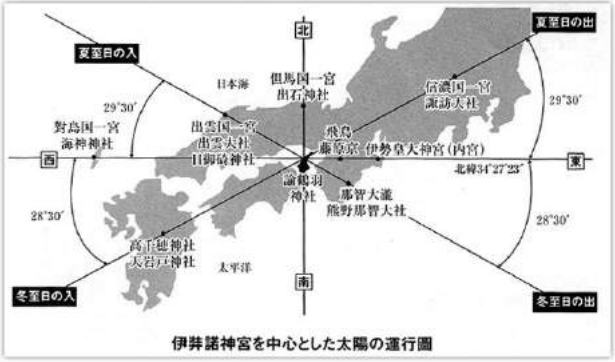
【伊弉諾（いざなぎ）神宮】　淡路市多賀

『古事記』・『日本書紀』の冒頭「国生み神話」に登場する、国生みの大業を果たされた伊弉諾尊(イザナギ)と伊弉冉尊(イザナミ)の二柱をお祀りする神社です。

すべての神功を果たされたイザナギ尊が、御子神である天照大御神に国家統治の大業を委譲され、最初にお生みになられた淡路島の多賀の地に「幽宮（かくりのみや）」を構えて余生を過ごされたと記されています。その御住居跡に御神陵が営まれ、そこに最古の神社として創始されたのが、伊弉諾神宮の起源です。『古事記』・『日本書紀』に記載がある中では全国で最も古い神社で、淡路国一宮として古代から全国の掌敬を集めています。延喜式の制では名神大社、三代実録には神格一品、明治の制度では官幣大社で昭和 29 年兵庫県唯一の「神宮号」を宣下された神社です。地元では「いっくさん」と呼ばれ日之少宮、淡路島神、多賀明神、津名明神とも別称されています。

大鳥居は平成 7 年（1995）の阪神淡路大震災で倒壊しましたが同年 11 月に再建されました。

「陽の道しるべ」
伊弉諾神宮を中心にして、まるで計算されたように、東西南北には縁ある神社が配置されていることは実に不思議です。神宮の境内には、太陽の運行図として、このことを紹介する「陽の道しるべ」というモニュメントが建っています。神宮の真東には飛鳥藤原京、さらに伊勢皇大神宮(内宮)が位置しており、春分秋分には同緯度にある伊勢から太陽が昇り、対馬の海神(わたつみ)神社に沈みます。そして夏至には信濃の諏訪大社から出雲大社、冬至には熊野那智大社から高千穂神社へと太陽が運行します。



伊弉諾神宮を中心とした太陽の運行図

「夫婦大楠」
境内には、イザナギ・イザナミの二神が宿る御神木として、夫婦円満、安産子授、縁結びなどの御利益があると信仰されている樹齢約 900 年の夫婦大楠があります。

注）この項、淡路島観光ガイド・あわじナビ他より抜粋

【自凝島神社】　南あわじ市榎列

古事記・日本書紀によれば神代の昔国土創世の時、男神イザナギと女神イザナミが天の浮橋に立って、天の沼矛で青海原をかき回し、その矛先から落ちたしずくが自ら凝り固まってできたのが自凝島で、二神はこの島に降り立ち淡路島をはじめ日本の国土を生んだとされている。おのころ島というのは、古くからいくつもの説が出されてきた。淡路島の南西に浮かぶ沼島にも自凝神社があり他にも絵島もおのころ島の発祥地だとする説があります。

今回は三原の自凝島神社へ行きます。イザナギ・イザナミ二神が祀られており縁結び、安産の神として知られている。
大鳥居：高さ 21.7mの朱塗りの大鳥居は昭和 57 年(1982)3月に建立。境内には正殿、御神木、鶺鴒石などがある。
周辺には
「天の浮橋」 天と地の間を神が登り降りして通われる道にかかる橋と伝えられる。
「屯倉神社跡」大和朝廷の屯倉がおかれて御食国と呼ばれ朝廷に納める鳥・獣・米などを屯倉で管理していた。
「葦原国」周りに葦が茂り、中に沃土があるという日本国の別称。など国生み神話にちなむ場所が祀られている。

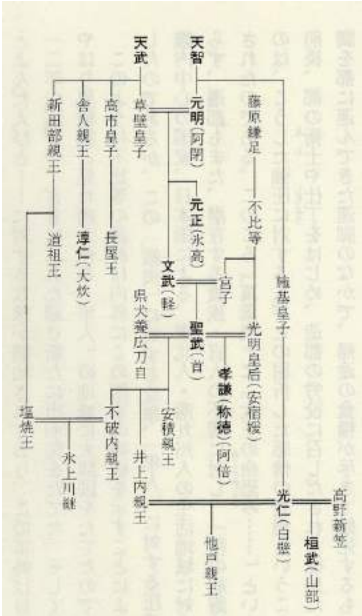
【淡路国分寺】（淡路国分寺塔跡）　南あわじ市八木

国分寺は天平 13 年（741）[45]聖武天皇が、醜い政争や凶作・悪疫の流行などによる社会不安を、仏教の力によって鎮めようとして、諸国に国分寺と国分尼寺の建立を発願された。淡路国分寺（律宗）の創建年代やその姿についてはまだよく判っていない。『日本霊異記』によると、紀州の漁師が宝亀 6 年（775）に淡路島に漂着し、国分寺に入って僧となったとある。奈良時代の淡路国は、財政規模が小さい上、飢饉や疫病が頻発していたので、国分寺の完成までにはかなりの年月が要したものと考えられ、境内から出る古瓦も奈良時代後期のものである。最近の調査によって寺域や伽藍配置などが次第に明らかになってきたが、今大日堂の建っているところが塔跡（国史跡）で、心礎があり、周辺には 11 個の礎石が残っている。

一時期荒廃し、室町時代の大永 5 年（1525）僧俊泉（しゅんせん）が再興したが、天正年間（1573－92）に兵火で焼失、江戸時代初期の寛文 5 年（1665）に僧照運が重興し、貞享元年（1684）本堂を再建したという。このように幾度か盛衰を繰り返しながらも、旧境内地に寺が続いたため比較的その旧地が残ったものと思われる。本尊の木造釈迦如来座像は、高さ 2.95m の所謂丈六の仏像で、国分寺の本尊にふさわしい重々しさをもっている。胎内の墨書銘によると、南北朝期の暦応 3 年（1340）大仏師観地房命円の造立であることが判る貴重なもので、昭和 25 年国重文に指定されている。

【[47]淳仁（じゅんにん）天皇淡路陵】　南あわじ市賀集（がしゅう）

[46]孝謙天皇の皇太子　大炊（おおい）王（天武天皇の皇子の舎人親王の第七子）が、時の権力者藤原仲麻呂（恵美押勝）の推挙で天平宝字２年(758) 譲位を受けた。[47]淳仁天皇である。



天皇は、この頃から孝謙上皇の寵が上皇の病を治した弓削道鏡（ゆげのどうきょう）に移っていったのを、除こうとして失敗した仲麻呂（恵美押勝の乱）に、深く関わっていたとして皇位を追われ淡路へ流された。孝謙上皇は再称して称徳天皇となる。幽閉されていた廃帝は、ここ三原町の野辺宮に移され、ここで亡くなられたと云う。また野辺宮で火葬された上約 150 m 東にある“丘の松（陵墓参考地）”に埋葬されたとも言われている。江戸時代天皇陵の所在地について諸説があったが、明治３年(1870)廃帝に淳仁天皇の諡号が追贈されるとともにこの地が淳仁天皇陵と治定され、周囲に堀と柵を造って整備された。

【絵島】　　淡路市岩屋

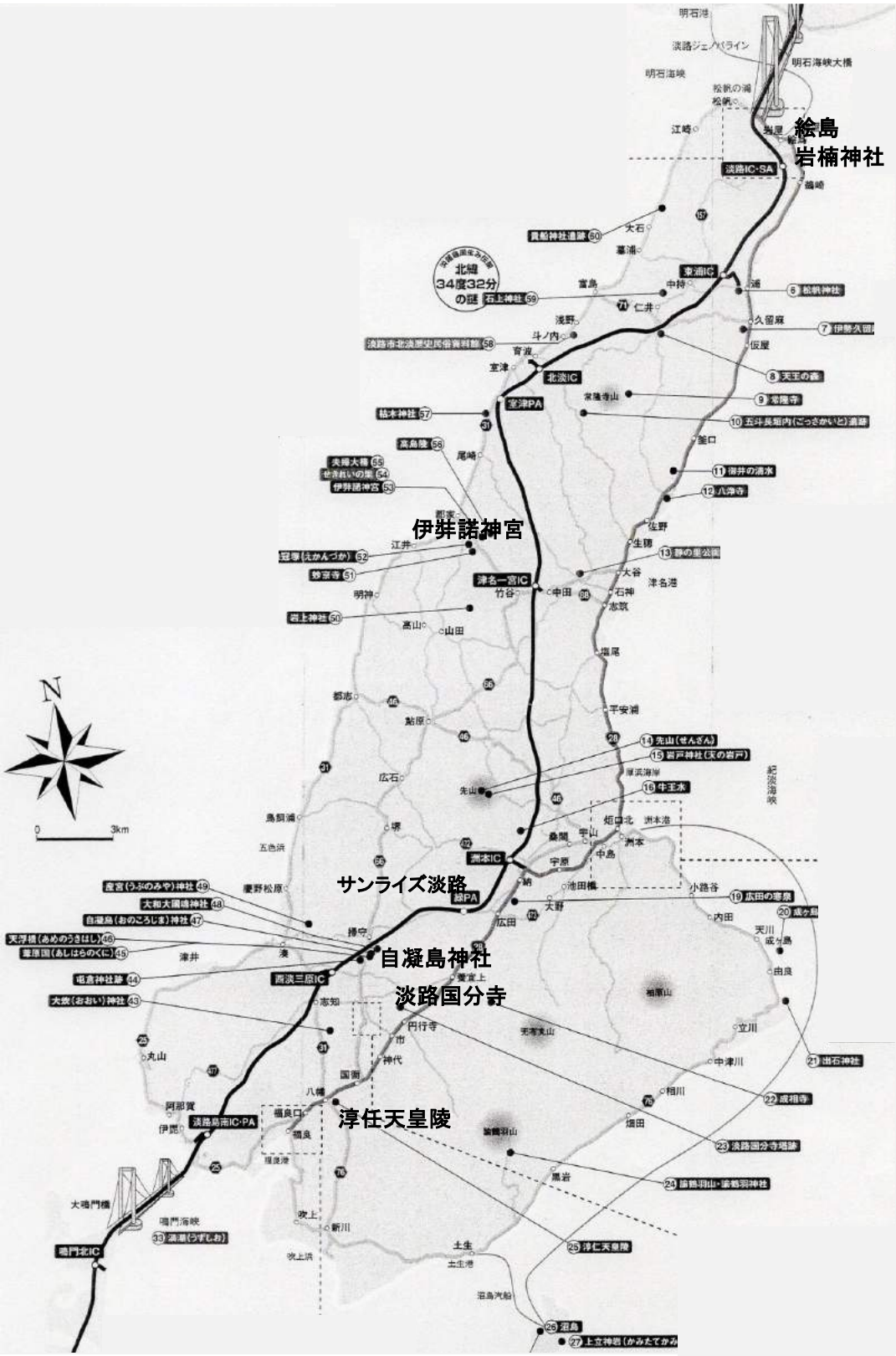
淡路島にいくつかある『おのころ島』との説がある。約2千万年前の砂岩層が露出した小島。昔から月の名所としても知られ、平家物語の月見の巻にも登場。平清盛があわ貿易拠点として大輪田の泊（神戸市兵庫区）を造る際、人柱となった清盛の小姓松王丸を祀ったとされる。古来より、和歌を詠む名所としても知られ、その美しさは多くの人々を魅了する。西行法師の歌もある。

【岩樟（いわくす）神社】　　淡路市岩屋

岩屋港のすぐ近く。岩屋城跡のある城山の下に、イザナギ尊・イザナミ尊とその子である蛭子命（ひるこのみこと）を祀る岩樟神社がある。この奥には高さ1.8m、奥行き6mの窟があり入口に小さな祠。イザナギの尊が最初に築いた幽宮（かくれのみや）との説もある。
岩屋で生まれた蛭子命は西宮に流れ着き、西宮戎神社のご神体になったと伝えられる。岩樟神社の前の境内には漁業の神として信仰された恵比須神社がある。

＜メモ＞

作成　　末岐敏一
改定復刻　堀内　肇


絵島
岩楠神社
伊弉諾神宮
サンライズ淡路
自凝島神社
淡路国分寺
淳任天皇陵
明石海峡大橋
淡路IC・SA
東浦IC
北淡IC
室津PA
津名一宮IC
洲本IC
淡路島南IC・PA
鳴門北IC
大鳴門橋
北緯34度32分の謎
N
0
3km